

環境未来館 ビオトープ物語 ④



こうべ環境未来館（西区）の名物となっているビオトープ「未来の泉」。連日、夏休みの家族連れでにぎわっているが、オープンから7年目を迎えるのを機に、生い立ちなどを紹介する「未来館・ビオトープ物語」を3回に分けてお届けしよう。

池掘り、魚も採って...手作りだ

ビオトープづくりが始まったのは、未来館が開設された平成16年6月。神戸市の協力でグループわの中島洋吉さんらが中心となって費用をかせず市民の手作り リユース・リサイクル品を活用する 市民が生物と触れ合える場所に 地域の生き物・植物で出所のはっきりとしたものを移入 雨水や自然エネルギーを活用する など5項目のコンセプトを決めた。ドイツ語でビオは生物、トープは場所。「野生生物の生息空間」という意味の環境用語だ。

当時、神戸市では「学校ビオトープ」の整備が進められており、未来館のビオトープはそれらのお手本にしようとの狙いがあった。作業の手順は、

- (1) 機械による荒掘
- (2) ゴムシートが貼れるように池を整備（手作業に

より池の形づくり・石拾い・面の仕上げ）

- (3) ゴムシート貼り（池いっばいにゴムシートを広げ土をかぶせる。ゴムシートは三ツ星ベルトの提供）
- (4) 循環水路づくり（ゴムシート貼り）と点検台および渡り歩廊の取付け
- (5) 水の循環の電力供給用として太陽光発電および風力発電設備の取付け
- (6) 未来館周辺の河川の支流や草地から生物・植物の移入（業者や園芸店から購入したものは入れない）

【生物】メダカ、ヌマエビ、ドジョウ、カワナ、ヤゴ、タニシ、シジミなど【植物】ヒシ、オニビシ、ガマ、ヒメガマ、フトイ、セリ、ジュンサイ、スイレン、ハスなど



作業には子供たちも含め延べ240人の市民が参加。十数種類の植物や魚・昆虫類を移入して10月5日に完成、お披露目となった。その後、神戸市内では小学校166校のうち約110校でビオトープが作られたが、その多くは管理がうまくいかず、ザリガニなどの住処になってしまっている。そうした中で、未来の泉だけはビオトープ本来の機能を保ち、環境教育に役立っているのが自慢だ。（写真は池掘り作業中の市民たち＝平成16年夏）（環境未来館 山口 俊雄）

親鳥の愛情度？調査結果

子育て最中のシジュウカラの親鳥は外敵の襲撃を避けるため、白いゼリー状の袋に包まれたヒナのフンを近くには捨てないが、どこまで捨てに行くかの調査にチャレンジ。（こんな珍調査は日本初？世界初？）5/18と5/28の2日間、10名の仲間とP2とP4の駐車場で実施。

その結果、駐車場に人や車の動きのある時には巣箱から100m以上遠方へ、人等の動きのない時には巣箱から30-40m離れた駐車場の道路上に捨て（危険物？の車上には捨てない）、その後近くの樹でヒナの餌となる虫を採取することが判明。ヒナを懸命に育てる親鳥の愛情の一



端が分かった感じ。来春も継続調査をしたい。観察・調査には北邨、井口、井上、川上、福田、高島、多賀、三浦、柳田、茅中が参加した。

イタチごっこ始末記

「情報ぎやらりー・50号」で、しあわせの村・P2駐車場周辺の巣箱が冬期にイタチに襲われていることをお伝えしました。その後猫避けの突起付きプラスチックネットを針金でつなぎ、巣箱の下の樹の幹に巻きつける方法で6巣箱に取り付け、その効果を見守りました。どうやら効果がありそうで一安心。写真はイタチに巣穴を噛み広げられた後、突起ネットを付けた巣箱です。その後シジュウカラのヒナが無事巣立ちました。（野鳥と自然観察会代表・茅中英一）